

マルティン・ファン・ブライネセン著
『アーガー・シャイフ・国家：
クルディスタンの社会・政治構造』(1)

山 口 昭 彦

齋 藤 久美子

武 田 歩

能 勢 美 紀

(共 訳)

Martin van Bruinessen, *Agha, Shaikh and State: The Social and Political Structures of Kurdistan*, London and New Jersey: Zed Books, 1992 (A Japanese Translation, part I)—

This is a Japanese translation of the *Preface* and *Introduction* of Martin van Bruinessen's *Agha, Shaikh and State: The Social and Political Structures of Kurdistan*, London and New Jersey: Zed Books, 1992. The book is a revised edition of the author's doctoral dissertation, *Agha, Shaikh and State: on the Social and Political Organization of Kurdistan*, which appeared in a limited edition in 1978. Based on an intensive field research in various parts of Kurdistan and an extensive reading of historical sources, this book elucidated the political and social organization of the Kurdish society as well as its historical evolutions. Soon after its publication, the dissertation was highly appreciated as an epoch-making achievement, and its revised version, published by Zed Books, also has been distinguished as a significant milestone in the field of Kurdish studies. Although more than twenty years have passed since its publication and some similar works on the subject have been printed, Bruinessen's work remains a classic of the Kurdish studies and the theories he formulated on the Kurdish society still wield considerable influence. A Japanese translation of the book will undoubtedly contribute to the development of the Middle Eastern studies in Japan.

訳者解題

本稿は、マルティン・ファン・ブライネセン『アーガー・シャイフ・国家：クルディスタンの社会・政治構造』(Martin van Bruinessen, *Agha, Shaikh and State: The Social and Political Structures of Kurdistan*, London and New Jersey: Zed Books, 1992)の「はしがき」と「序章」を訳出したものである。

「クルド人の土地」を意味するクルディスタンは、トルコ、イラク、イラン、シリアなどの国境地帯にまたがる広大な地域を指しており、歴史をさかのぼれば、古代メソポタミアや肥沃な三日月地帯とも重なる、古くから文明の栄えた土地でもある。ザグロス山脈に沿って延びるこの地域には、険しい山岳地帯だけではなく、ティグリス川やユーフラテス川など大小さまざまな河川や水流によって豊かに育まれた農地や牧草地が点在していた。くわえて、アジア諸地域と地中海世界を結ぶ東西交易路が縦横に走り、古くから各地に都市が発達してきた。現在では、国境地帯に位置し、石油や水資源など天然資源に恵まれていることもあって、地政学的にきわめて重要な地域となっている。

クルド人は、インド=ヨーロッパ系の言語で、イランの国語ペルシア語にも近いクルド語を母語とする人々である。中東地域の他の民族集団がそうであるように、クルド人を何らかの肉体的な特徴によって定義することはできない。宗教的には多くがスンニー派イスラム教徒だが、このほか、シーア派イスラム教徒、アレヴィー派、ヤズィード派、アフレ・ハック派など、さまざまな宗教・宗派を信奉する人々がいる。人口は、2000万から3000万を数えるとされることもあるが、いままって正確なところはわからない。クルディスタン周辺には、トルコ語、ペルシア語、アラビア語、アルメニア語などを母語とする多様な民族集団が暮らす。クルド人たちはこうした集団と混じり合い、影響を受けつつも、独自の文化を培ってきた。

第1次世界大戦後、トルコ、イラク、イラン、シリアなどの新興国家が多数派民族集団を中心とする国民統合や中央集権化を進める中で、クルド人は少数派としてしばしば同化政策や弾圧にさらされてきた。こうした「上からの」強引な政治統合や差別に反発するクルド人の中から民族的権利や自治を主張する動きが活性化し、ときに武力をもとまう民族解放運動へとつながっていった。これが各国で現在まで続くクルド人問題の基本的構図である。

本書は、クルド人問題やクルド民族主義運動が展開する場としてのクルド社会のもつ政治・社会構造の特徴や多様性を明らかにしながら、その歴史の変容過程を鮮やかに描き出した記念碑的著作である。もとになったのは、著者ブライネセン氏が1978年に限定版として公にした博士論文「アーガー・シャイフ・国家：クルディスタンの社会・政治組織について *Agha, Shaikh and State: on the Social and Political Organization of Kurdistan*」である。クルド人問題やクルド研究といっても当時はまだかぎられた数の研究者やジャーナリストが関心を寄せる程度であり、そうした中で発表された氏の博士論文が早くから高い評価を得たのは言うまでもない。私自身、ドイツの本屋に手紙を書いてようやく手に入れ、その精緻な（しかし、少なからず難解な）議論に魅了されたのを覚えている。その後、1992年にはより広い読者を対象にした改訂版（本書）がZed Booksから出され、今日ではクルド研究の古典的文献のひとつとなっている。現在では、本書とそれのもとになった博士論文がいずれもPDFとしてウェブ上に公開されている。

もともとオランダの名門ユトレヒト大学で物理学や数学を専攻していた著者は、1960年代末から、毎夏、休暇を利用して中東各地を訪れるようになっていた。1946年生まれの著者が、二十歳を過ぎたばかりのころだったのだろうか。ちょうど、イラクでは、ムッラー・ムスタファー・バールザーニー率いるイラク・クルディスタン民主党が激しい自治要求闘争を展開していた時期である。こうした旅を通じてクルド人に魅せられた著者は、専

攻を人類学や社会学へと変えて、本格的な研究に取りかかる。

当時、イラクでは、クルド民族主義運動が、一方ではクルド人の民族解放を旗印に掲げつつも、他方で、その動員は個々の部族的紐帯に大きく依存していた。これはいったいどういうわけなのか。こうした問いから、著者の探求は始まる。ハムザ・アラヴィーの唱えた「原初的忠誠心」という概念を援用しながら、部族や宗教・宗派、あるいはイスラム神秘主義教団などへの帰属意識がクルド民族主義運動においていかなる役割を果たしているのかという問いに果敢に挑戦していくのである。

当初、著者がめざしたのは、長期間、特定の地域に滞在するような人類学的調査によるデータ収集であった。それまでのクルド研究が曖昧な印象に依拠しがちであったことから、より確かな事実やデータを求めたのである。著者以前にもクルド社会を対象とする人類学的調査がなかったわけではないが、本格的な調査はこれがほぼ初めてであったろう。

ところが、1970年代前半のクルディスタンをめぐる政治状況はそれを許さなかった。パフラヴィー朝下のイランでは研究許可が下りず、トルコでもクルド人問題は依然としてタブーだった。イラクでは、1970年にいったんイラク・クルディスタン民主党とイラク政府との間で自治を認めることで合意していたものの、その実施をめぐる鋭い対立が生じており、戦闘再開も時間の問題となっていた。

やむなく著者は、なかば旅行者としてクルディスタン各地を転々と移動しながら、情報を集めていく。とくに1975年初頭には、イラク政府との交渉がいよいよ決裂しつつあったイラク・クルディスタンでの調査を敢行し、非日常的状況の中で浮かび上がってくるクルド社会の矛盾を肌で感じ取っている。こうして、それぞれの場所での滞在期間は短いとはいえ、クルド社会に深く入り込んで、その多様性への理解を深めていったのである。当時すでに遊牧民が減少するなどクルド社会は急激な変化を遂げつつあったが、今日から見る限り、「原初的忠誠心」がなお強く働いていたと思われ、その点、本書は、伝統的クルド社会を活写した貴重な同時代証言ともなっ

ている。

本書の魅力は、こうした幅広い聞き取り調査に加え、歴史資料を用いることで通時の変化をも射程に入れていているところにある。現代中東の国境が形作られる第1次世界大戦以前、クルディスタンはその大半がオスマン朝、一部がイラン系王朝の支配下にあった。こうした「分断」の発端となったのが、16世紀初頭におけるサファヴィー朝の成立とオスマン朝の東進であった。というのも、両者の角逐の中で、クルディスタンは両帝国の辺境に位置づけられていったからである。もともとクルディスタンには、アミールと呼ばれる君侯が家臣団としての部族連合を率いて各地に割拠し、周辺に強力な政治権力が現れる度に、臣従あるいは抵抗しつつ、自らの自律性を確保していた。そこに、二つの巨大な国家が勢力を伸ばしてきたのである。こうした歴史的経緯を踏まえ、著者は、16世紀以降、クルド社会が周辺国家にどのように編入されていったのか、国家の支配への統合はクルド社会の権力構造にいかなる影響を与えたのか、そして、19世紀以降の近代化の過程でクルド社会はいかに変容していったのかといった一連の問いを立て、クルド社会の歴史的変容過程の理論化を試みている。こうして、ともすれば共時的な構造分析に留まりがちな人類学的手法に加えて、歴史学的視点をもちこむことで、議論に深みや奥行きを与えることに成功している。

こうした著者の問題意識を踏まえれば、表題の意図するところはおのずと明らかであろう。アーガーとは、部族の族長の称号であり、シャイフとは、神秘主義教団の導師を指す。つまり、クルド社会における主たる「原初的忠誠心」の対象が、アーガーとシャイフであった。これら二つに国家を加えた3つの主要アクターに着目することで、クルド社会の権力構造が歴史を通じて次第に変容していく姿を浮かび上がらせようとしたのである。

本書は刊行からすでに20年以上が経っており、もとになった博士論文の出版から数えると、すでに40年近い月日が流れている。著者自身によるものも含め、その後の研究、とりわけ過去10年におけるクルド研究の急速な

進展や、隣接するオスマン史やイラン史などの研究の深化のため、部分的には古くなっているところや乗り越えられてしまったところもある。それでも、本書を翻訳するのは、以下の理由による。

第一に、本書が、世界のクルド研究においていまもって金字塔的な位置を占めているという事情がある。18世紀以来の歴史をもち、特に19世紀以降、クルド語やクルド文学などについて東洋学者たちによる一定の研究成果が挙げられつつあったとはいえ、中東研究の中にあってクルド研究は長くマージナルな存在であった。上記のように、最も多くのクルド系住民を抱えるトルコではクルド研究がほとんど許されず、外国人にとっても容易ではなかった。イラクについていえば、1960年代以降のバールザーニーらの武装闘争が、ジャーナリストのみならず、政治学者らの関心を徐々に惹きはじめていたが、あくまでも限定的なものであった。

湾岸戦争がこうした状況を一変させる。1991年3月、戦争でサッダーム・フセイン政権が大きな打撃を受けたのをみたイラクのクルド人たちが蜂起し、イラク北部の主要都市を次々に掌握していった。いわゆる「クルドの春」である。ところが、フセイン政権が鎮圧に乗り出すと、人々は報復をおそれて周辺諸国に大量の(100万人以上に上る)難民として流出した。おりしも、トルコでは、1980年代半ば以降、クルディスタン労働者党(PKK)による武装闘争が続いていた。こうしてトルコやイラクにおけるクルド人問題の存在が広く世界に知れ渡ることになったのである。ジャーナリズムのみならず、学術的な関心も高まって、欧米各地ではクルド研究の講座やコースを設ける大学も現れ、昨今では多くの優秀な若手クルド研究者が育ちつつある。クルド研究が、中東研究を構成する主要な一分野として制度的に確立されてきたと言えるだろう。

とはいえ、本書が提示したクルド社会に対する認識枠組みや歴史像はいまもって強い影響力をもちつつづけている。とくに、近年の研究の多くが近代以降に関心をもち、それ以前については相対的に研究が遅れていることもあり、ブライネセンが本書を通じて示したクルド社会の構造やその歴史

的変容についての理論は、現在もおおむね受け入れられている。また、研究が蓄積されてきたとはいえ、そのことは裏を返せば研究が細分化されてきたということでもある。もはやクルディスタン全体を見据えた、これほどスケールの大きな、しかも実証性を備えた研究は、なかなか出てこないであろう。以上が、本書翻訳の第一の理由である。

もう一つの理由は、上記のこととも関連するが、世界的にはクルド研究が隆盛を迎える中で、日本国内でのクルド研究が依然として停滞していることである。近年、質量ともに充実しつつある日本の中東研究にあっては意外とも言える状況だが、その最大の原因は、日本語で読める入門書や専門的な論文があまりに少ないことにある。従来の研究書や論文の中でもクルド人について触れられることはあったが、多くは断片的な記述にとどまり、歴史の中で、あるいは現代の中東政治の中で、クルド人やかれらの暮らすクルディスタンがどのような位置を占めているのかを俯瞰できるような文献はほとんど存在しない。いいかえれば、研究の土台や参照枠とするような、あるいは批判や修正の対象となりうるような「クルディスタン史」の枠組み自体がそもそも提供されてこなかったのである。クルド人に対してしばしば投げかけられる、「歴史に翻弄される悲劇の民」といった表層的な印象がいまなおまかり通っているのは、無理もないと言えよう。本書の日本語訳を示すことでこうした状況にブレークスルーを起こし、単に本書の学術的価値を日本の学界に広く知らせるだけでなく、この研究を真の意味で乗り越えるような、クルド社会についての新たな知見や歴史像を生み出すような研究が若い世代から生まれてくることを切に願う次第である。

なお、本書のもとになった博士論文の執筆経緯については「序章」の中で詳しく説明されているが、以下の2点も是非参照していただきたい。一つは、ブライネセン氏に対するインタビューを記事にしたものであり、もう一つは、氏自身がヨーロッパにおけるクルド研究の発展を概観したものである。いずれにおいても、氏自身が、みずからの博士論文作成のいきさ

つについて触れている。特に後者は、近年のクルド研究の隆盛についても紹介しており、きわめて有益である。

1. “‘I would be sitting in the village room where people gather,’ Interview with Martin van Bruinessen,” *European Journal of Turkish Studies*, vol. 5 (2006).
2. Martin van Bruinessen, “Kurdish Studies in Western and Central Europe,” *Wiener Jahrbuch für Kurdische Studien (Ausgabe 2/2014)*, Bremen: Wiener Verlag für Sozialforschung, 2014.

ここで、本書翻訳の経緯についても説明しておきたい。まず、本書の翻訳作業を当面の課題として2013年3月に「クルディスタン研究会」なる研究グループを本稿の共同執筆者4名で立ち上げ、毎月1回のペースで研究会を開いてきた。翻訳にあたっては、章ごとに割り当てた担当者による試訳をもとに全員で議論して訳文を練っていった。Zed Books版を底本としつつも、意味がとりにくいところなどでは、もとの博士論文のほか、トルコ語訳 (*Ağa, Şeyh, Devlet*, Istanbul: İletişim, 2003) やドイツ語訳 (*Agha, Scheich und Staat, Politik und Gesellschaft Kurdistans*, Berlin: Verlagsabteilung des Berliner Instituts für Vergleichende Sozialforschung, 1989) も参照した。著者によれば、ペルシア語やアラビア語にも翻訳されているとのことであるが、残念ながら入手できなかった。本稿では、紙幅の関係上、「はしがき」と「序章」のみを訳出したが、今後も、継続的に訳文を公表する予定である。

訳文中、「(著者名 発行年)」や「著者名 (発行年)」といった形で言及される文献については、本稿の末尾に参考文献一覧として掲載した。また、[] 内は、訳者による説明や補足を示している。

本書の構成は、以下の通りである。

はしがき

序 章

執筆の経緯／本研究の主題／文献資料についての注記

第1章：クルディスタン概観

地理／地政学的状況／人口／他の経済活動：手工業と交易／言語／宗教
／クルド民族主義運動：1960-85／イラン・クルディスタンとイスラム革命
／イラン=イラク戦争とクルド人／サッダーム・フセインによるクルド
人問題の解決／変化を見せるトルコの姿勢

第2章：部族，族長，非部族集団

部族とその下位区分／クルド語の用語／血の復讐と他の争い／指導者の
地位：称号と機能／ゲストハウス／経済的側面：アーガーへの貢納／さま
ざまな部族における指導者の地位をめぐる状況／過程としての権力：北部
ジャズィーラへの殖民／従属「非部族」農民層とクルド系部族民との関係
／グーラーンGuranとグーラーンguran／遊牧民と農民：一つの民族か、
二つの民族か／結論

第3章：部族と国家

はじめに／オスマン帝国へのクルディスタンの編入／クルド系君侯領の
政治史／16世紀オスマン帝国下クルディスタンの行政組織／クルド系君
侯領の内部構造／19世紀における政治変動／ベディル・ハーン・ベグの
台頭とポーターン君侯領の凋落／新たな土地法とその影響／クルド系部族
軍団の創設：ハミディエ／ミーラーン族のムスタファ・パシャ／ミーラー
ン族のイブラーヒム・パシャ／20世紀初頭の変化／おわりに

第4章：シャイフ：神秘主義者，聖者，政治家

はじめに／神の化身／デルヴィーシュとスーフイー教団／スーフイーと
デルヴィーシュ教団：組織化された民衆的神秘主義／事例としてのカー

マルティン・ファン・ブライネセン著『アーガー・シャイフ・国家：クルディスタンの社会・政治構造』(1)

ディリー教団の歴史／クルディスタンのカーディリー教団のシャイフたち
／ナクシュバンディー教団／ナクシュバンディー教団はなぜ急速に拡大し
たのか／カーディリー教団の儀礼／シャイフとハリーフア：他のシャイフ
たちとの関係／シャイフとムリード／千年王国思想／シャイフの影響力の
低下／イスラム復興：ヌルジュ運動

第5章：シャイフ・サイドの反乱

はじめに／クルド民族意識の歴史／オスマン帝国の終焉とトルコ共和国
の誕生／初期のクルド系政治組織／シャイフ・サイドの反乱／反乱への
国内外からの支持／ナクシュバンディー教団と反乱／宗教的性格と民族主
義的性格

最後に、著書の日本語訳公開を快くお許し下さった著者ブライネセン氏
に、訳者を代表して心よりお礼申し上げます次第である。

(文責 山口 昭彦)

マルティン・ファン・ブライネセン著

『アーガー・シャイフ・国家：クルディスタンの社会・政治構造』

はしがき

本書は、もともと1978年に発表した博士論文を改稿したものである。数カ所、書き直しを行い、詳細にすぎる部分については一部省略した。また、論文発表後に生じた新たな事態についても若干の論評を加えた。しかし、中心となる議論には大きな変更を加えていない。1978年以降、本書で取り上げたさまざまな主題に直接関わる多くの文献が発表されたが、それらについては、必要に応じて注を付して言及した。後に発表されたものや私自身の研究成果によって、もとの考えを修正せざるを得ない場合も一つ二つあった。とくに、ヌルジュ運動 [クルド系のサイド・ヌルスイー Sa'id Nursi (1873/76-1960) を祖とするトルコのイスラム団体] に関わる部分(第4章参照)などがそうである。だが、それ以外については、いまなら別の形でまとめるかもしれないが、もとの解釈や構成の大部分をそのままにしている。

情報収集にあたっては、多くの方々やいくつかの機関にお世話になった。およそ2年にわたって中東に滞在することができたのは、オランダ基礎研究振興機構 (ZWO, Netherlands Organization for the Advancement of Pure Research) の潤沢な研究助成金のおかげである。ロンドンにあるイギリス国立公文書館 (Public Record Office) には、膨大な文書資料を閲覧させていただいただけでなく、そこから引用することも認めていただいた。ユトレヒト大学での指導教授であったトデン・ファン・フェルゼン Thoden van Velzen教授と、とくにファン・バール van Baal教授からは、助言や刺激を頂戴したうえに、私がやりたいようにすることもお許しいただいた。とはいえ、最もお世話になったのは、研究のさまざまな段階で助

けていただいたクルド人の友人たちである。その多くは名前が挙げられることを望んでおられないだろうが、これらの方々全員に感謝し、本書を捧げたい。

序 章

執筆の経緯

本書には研究当時の状況が刻印されている。基本的な考えのいくつかは現地調査を進めるなかで頭に浮かんだものであり、調査の条件が違っていたら思いつくこともなかっただろう。はじめてクルド人に興味をもったのは、1967年に中東を訪れたときのことである。当時、私はまだ物理学の学生だった。かつてクルディスタンを旅した人たちがそうであったように、私もまたかの地の景観に畏れを抱き、そこに住まう人々の歓待に嬉しい驚きを覚え、彼らの語る民族的抑圧と抵抗の物語に心打たれた。それは、まったく現実離れした憧れのはじまりであった。何度も訪問するなかで憧れは少しずつ現実的な認識へとかわっていったが、それでも消えることはなかった。それは、クルディスタンを分断している国々であって、クルド人たちが厳しい政治状況におかれつつも、たえず政府と対峙していたからにほかならない。

クルディスタンを旅したことで、私の知的関心も物理学から社会科学へと移り変わった。人類学や社会学の授業を受講し、1960年代後半の政治的・知的雰囲気の影響を受けて、農民反乱・メシア運動・民族主義・階級意識といった諸問題にかかわる理論に強い関心を寄せるようになった。クルド人の歴史は、これらの理論の多くに、ほとんど理想的ともいえる検証の場を提供できるのではないかと思いついた。なぜなら、今世紀〔20世紀〕だけでも、クルディスタンではメシア的性格と民族主義的性格の両方を備えた多くの農民反乱が起きていたからである。しかし、どういうわけか、クルド人の事例は、理論を説明する際によく引き合いに出される、他のもつ

と一般的な事例とは異なっているように思えた。端的に言えば、農民革命家たちが一般に左寄りと目されているのに対し、クルド人は右寄りに見えたのである。

1961年に始まったイラクのクルド人たちの闘争〔ムッラー・ムスタファー・バールザーニーらイラク・クルディスタン民主党による自治要求運動〕には次第に一般大衆も参加するようになり、60年代後半になると、主に農民からなる数千人のクルド人が歴代イラク政府に対するゲリラ戦に身を投じた。1974-75年には、5万人を超えるまでになった。しかも、クルディスタン各地に何度か足を運んでいるうちに気づいたのだが、積極的に戦わなかったクルド人の多くも戦った者たちに何らかの形で共鳴していた。これはイラクにおいてだけではなく、クルディスタンの他の地域でも同じだった。したがって、数の上では、この運動は確かに人民戦争、つまり、エリック・ウルフが主著（Wolf 1966）のなかで描いた6つの農民戦争に匹敵するものであった¹。ただ、これら6つの運動は、進歩的なものであった。農民たちは搾取する者たちへの抵抗へと動員されたが、そこでは、少なくとも部分的には階級利害が働いていた。しかも、運動は、帝国主義に反対し、社会的不公平の一掃をめざしていた。これに対し、とくに1966年以後のクルド人の運動は、正当な要求を掲げていたとはいえ、保守的で、反動的とさえ言える様相を呈していた。クルド人の指導者たちは、帝国主義勢力による域内介入が減少するどころか一層増大するのを求めているかのようなようだった。〔運動の指導者であった〕ムッラー・ムスタファー・バールザーニーはアメリカに対する親愛の情を繰り返し表明し、〔イラクの〕クルディスタンをアメリカの51番目の州とすることを望んでいた。しかも、支援の見返りにクルディスタンにある石油の管理権をアメリカに進んで提供しようとしていたのである。

左派分子は、次第に運動から排除されていった。はじめは都市部の若い

¹ これらは、メキシコ革命、〔ロシア革命〕、中国革命、ベトナム革命、アルジェリア革命、キューバ革命であった。

民族主義者に権威を脅かされていた伝統的指導者たちも、みずから運動に加わることで地位を強化あるいは回復できたようだった²。こんな具合に大部分のイラク・クルド人は、パールザーニーを支持した。彼とライバル関係にあった左派グループを支持したのは、ごくわずかだった。

たとえば、オマーンにおけるドファールの運動〔1960年代に起こったドファール地方の分離独立運動〕は大半が部族に属する人々による解放運動であったが、クルド人の運動とは対照的に見えた。ドファールの運動はきわめて革命的との評価を得ており、左派系メディアのお気に入りであった。それに対し、クルド人の運動は、英米の保守系メディアに好まれた。この違いには2つの明確な理由があった。ドファールの運動は反動的で抑圧的な親西側体制と戦ったのに対し、クルド人の運動は権威主義的で改革主義的な抑圧的親ソ政権と戦った。しかも、二つの運動の指導者たちは、まったく異なる出自をもっていた。とはいえ、これら2つの要因だけで違いを説明できるだろうか。イラクにおけるクルド人の運動は1964年から66年にかけてあからさまに右傾化したが、それには内的理由もあるにちがいないと私には思えた³。貧農たちは、部族長や地主に抗して自己の権利を守るどころか、自らの利益にならないものために戦っていた。このことに、部族組織や他の「原初的忠誠心」(Alavi 1973)はどれほど関わっていたのだろうか。こうした忠誠心は消えつつあったのか、もしそうなら、どのように、どういった状況においてであろうか。帝国主義は伝統的クルド社会に対し厳密に言ってどんな影響を与えたのだろうか、そしてこうした帝国主義の影響によってクルド人の運動の性格を説明できるだろうか。1973年に現地調査の準備を始めた際に私の念頭にあったのは、こういったさまざまな疑問であった。

² イラク政府の宣伝により、こうした見方は強調され、当然、誇張された。しかし、パールザーニーやクルド民族主義者たちの影響力に対抗すべく、しばしばイラク政府がこうしたクルド社会の伝統的権威と協働してきたこともまた事実だ。

³ 段階的に運動は保守化したが、その転換点となったのは、1964年にイラク・クルディスタン民主党が分裂し、指導部から都市出身の急進分子が実質的に排除されたことである。Vanly 1970: 218-25; Kutschera 1979: 246-52; Jawad 1981: 163-73; Ibrahim 1983: 517-32を参照。

私は、在地社会の伝統的権力関係がいかなるものであり、また、国家による統制の拡大や世界市場への統合が階級関係やとりわけ中下層の農民の階級意識にどのような影響を与えたかに焦点をあてることにした。研究を進めるにあたっては、ごく限定された地域（3つないし4つの近接した村落）に相当期間（1年以上）留まるという、伝統的な人類学調査を実施するつもりだった。そうすれば、クルド人に関する文献のなかにあふれている漠然とした印象などではなく、信頼に足るデータを収集することができるだろう。

さまざまな政治的要因から、調査地域の選択には制限がかかった。1974年の春にはクルド人とイラク政府との間で新たに戦争が始まることが予想され、イラクでは歓迎されないだろうと思った。トルコもまた、クルド人に興味をもつ人類学者を受け入れてくれそうになかった。1972年、トルコの社会学者イスマイル・ベシクチは、クルド人に関する社会学的・政治学的研究（Beşikçi 1969）のために13年の禁固刑を言い渡されていた。彼の研究が分離主義を煽るものと見なされたのである⁴。唯一の可能性であるように思われたのが、イランのクルディスタンである。短期間ながら2度ほど訪れ、私が関心をもっていた現象の少なくとも一部を研究するのに十分見込みのありそうな場所をすでに選んでいた。イラク国境からだいぶ離れており、イラクで始まろうとしている戦争で混乱が生じて、巻き込まれずにすむと信じていた。イランがこの戦争に関与しようとしていたのは明白だったが、それがどの程度になるのか、当時の私には知るよしもなかった。正式に研究許可を申請したが、満足な回答が得られなかったので、手続きを早めるために1974年7月にテヘランへ向かった。

最初の申請がよくわからない理由で却下されたため、修正のうえ再申請

⁴ ベシクチは、1971年から1973年の戒厳令下に裁判にかけられ、戒厳令後初の自由選挙により成立した政府が発令した1974年の恩赦により釈放された。彼はクルド人問題に関わり続け、クルド人に対するケマル主義のイデオロギーや政策を批判する著作をいくつか発表し、そのため1979年に再び収監された。服役中にひそかに海外に出した手紙が、刑期を終えた後に、再度収監される理由とされ、1987年まで禁固刑を科された。

した。これを何度か繰り返したが、11月になって最終的に却下された。この間、何度か旅に出た。クルディスタンに1度、イラン北東部ホラーサーン州に2度である。ホラーサーンにも、相当数のクルド系住民が暮らしている。この旅のあいだ、のちに何度も直面することになる問題に遭遇した。調査許可を得ていなかったために、観光客として動き回れるだけで、どこであれ一カ所にあまり長く留まることはできなかった。ある場所に短期間しか滞在しないと、会うのは主に在地の有力者ということになる。たいてい、こういった人とばかり、しょっちゅう会うことになる。というのも、こうした人たちは、村で起こるあらゆることを把握しようとするからである。彼らは、村を訪れる者は誰であれ（とくに外国人の場合には）会って、訪問の理由を把握しておきたいのである。訪問者の歓待は、村長の伝統的特権であり義務でもある。一般の村人がこの役目を担おうものなら、村長の特権を侵害することになる。私が村のなかでも裕福で有力な人々と比較的頻繁に会ったのは、調査許可をもたない私と話すことで一般の人々がやっかいな立場になるのではと心配したからでもある。教育があり豊かな人々なら外国人と接触しても、比較的受け入れられやすい。社会階層の頂点とばかり交わって底辺の人々と交流しないと、事実を大きく歪めてしまうか、すくなくとも、社会において「企業家entrepreneurs」や他の「実力者strong men」⁵が占める重要性を誇張してしまいかねないことは自分でもわかっていた。それでも、大半の時間を村長、部族長、シャイフたちと過ごさないわけにはいかなかった。

のちになって、私は交際範囲を広げる方法を見つけた。知り合いのいる村、つまり、たいていの場合、村の教師か、町で学んだ村のシャイフの息子など、どこかよそで会ったことのある人がある村を好んで選んだ。完全なよそ者としてよりも、友人としての方が、ずっと自由に話し相手を選べたからである。シャイフのもとに滞在することで、あまり恵まれない人々

⁵ ベイリーやバルトラによって提唱された「ビッグ・マン理論」に対する優れた批判として(Thoden van Velzen 1973)がある。

と話すこともできた。というのも、あらゆる階級の人々が定期的にシャイフのもとを訪れるからである。とはいえ、私の現地調査記録では有力者層やかれらの考えが過剰に取り上げられているにちがいないし、本書も同様である。

ホラーサーンのクルド人を訪れたことで、部族組織と国家の政策との間に緊密な相互関係があることにはじめて気づいた。この地の部族連合はもともと国家によってつくられたもののように見えた。諸部族が認める大部族長は、少なくとも19世紀にはシャーから称号を得ていた（第3章参照）。最初、これは特殊な状況だと考え、どのようにしてこうなったのかを知ろうと史料を読み始めた。あとになって、多くのクルド系諸部族が周辺の国家によって長く影響を受けてきたことに気づいた。この種の情報は、部族民からよりも部族長たちから耳にする可能性が高く、事実、多くをこうして収集した。過去4世紀の一次資料や二次資料を批判的に読むことで現地調査を補った。本書の第3章はこれをもとにしたものである。

イランのクルディスタンを2度にわたって旅した際には、多くの時間をシャイフやデルヴィーシュ〔イスラム神秘主義の修行者〕たちと過ごした。旅の途中、ほかにも多くの旅行者がいることにちょっと驚いた。難民として、あるいは「革命」（当時、民族主義運動を一般にそう呼んでいた）のために謎の任務を帯びてイラクからイランへやってきたクルド人たちだった。レザーイーエ〔トルコ国境に近いイラン北西部の町、現オルミーエ〕でイラクのクルド人たちに会おうとしたときには、仕事熱心なサーヴァーク（国家情報安全機構）の職員が妨害してきた。しかし、サルダシュト、バーネ、マリーヴァーンといった小さな町に滞在した際には、イラクのクルド人と顔を合わさないわけにはいかなかった。ホテルではたいてい相部屋だったからだ。〔1974年に〕戦争が始まって以来、イラク・クルディスタんで何が起きているかについて、新聞記事をのぞけば、こうやって最初の印象を得たのである。イランがどの程度関与しているのかもわかってきたが、私の予想をはるかに超えるものだった。私が会ったイラクのクル

ド人たちによれば、在テヘラン・クルド代表部に許可を申請すればイラク・クルディスタンの解放区で調査できるかもしれないということだった。イランでは調査許可をもらえそうにないのがはっきりすると、すぐに言われたとおりにした。クルド代表部は礼儀正しく協力的で、申請を認めてくれた。1975年2月6日、私は国境を越えてイラク・クルディスタンに入った。この時点ではなお、当初計画していた調査を実施するつもりだった。戦争で移動の自由は制約されるだろうが、クルド人にとっては平和よりも戦争の方があたりまえになっており、そうした戦時のクルド社会を調査するまたとない機会を提供するだろう。こうした状況はまた、民族への忠誠心と部族や階級への忠誠心との相克の問題を研究するのにも好都合だろう。運動が崩壊してしまったため、到着後6週間で、全戦闘員および大勢の一般住民とともに退去せねばならなくなった。運動は完全にイランのシャー(国王)に依存していたが、シャーが宿敵イラク政府と合意し、直ちにクルド人に対する支援をすべて打ち切った。これが、劇的な結果をもたらした。いまやクルド人たちはイラク軍に投降するか、イランに逃れることを迫られた。パルチザンによる抗戦を考える者もいたが、指導部はそれを禁じた。村人たちは大挙してイランへと逃れた。私が滞在していたバーリク地域も、1975年3月20日までにほぼ空になった。

イラク・クルディスタンで過ごした6週間は、現地調査全体を通じてもっとも深い印象を残すものだった。毎日、悲惨、絶望、病気、死に遭遇した。運動が崩壊し始めると、それまで注意深く隠されていたクルド社会や運動内部での多くの諍いが露わになった。それはクルド社会について多くのことを教えてくれたが、深い傷跡を残すような経験であった。感情的にのめり込んでしまっていた。イランへ戻った後も、私は難民たちと密に連絡をとり、反体制派の人々に長いインタビューを行った。彼らも、その時には以前より率直に私と話してくれるようになっていた。

こうした事件に加え、調査許可を得るのも難しかったので、クルディスタンのほかの地域をあちこち訪ね、多様な形態をもつ社会組織や社会変動

のプロセスを調査することで、研究を続けることにした。主にトルコ・クルディスタンに焦点を当てることにした。地理的に広く、しかもかなり自由に旅行できたからである。

1975年6月から1976年8月まで、トルコ、シリア、イランのクルディスタン各地を旅した。多くの場所では、私が関心をもっていたことの大半を直接観察するわけにはいかなかった。このため、通常的人类学的現地調査に比べ、私の現地調査資料ではインタビューが大きな割合を占めている。しかも、その多くは過去の状況や事件にかかわるものである。加えて、インフォーマントたちは日付や具体的な歴史的な文脈に関して正確ではなかった。このためもあって、文献資料を多く読むことで現地調査を補った。

私が採用した手法には、ひとつの明らかな問題がある。つまり、さまざまな時代や場所から真に比較可能なデータを見いだすのは、不可能ではないにしても難しいということである。ほとんどの場所で短期間しか滞在しなかったため、定量的データを収集するのは概して不可能だった。同様に、非構造化インタビューを手法の一つとすることで、どこでも多くの資料が得られたが、他の場所で収集したものと正確に対応することはなかった。私自身やインフォーマントの関心によっても、インタビューは左右された。他方で、インタビューを厳密に誘導しようとしなかったからこそ、きわめて興味深い、予期せぬ情報を手に入れることができた。私自身の考えも、インフォーマントたちによってかなり変えられたが、もちろん、彼らが望んだ方向に変わるとはかぎらなかった。観察記録を比較することははるかに難しいこともわかった。例えば、複数の場所で類似の紛争を目にすることはあまりない。同じことはおそらく史料についても言えるだろう。私が読んだ大部な文献には稀観書収集家にとっての珠玉作品が多く含まれていたが、私が見えるものはあまりなかった。現在の状況を過去の状況と比較するために私が探していたような資料は、たいてい見つからなかった。したがって、この研究は、理論を検証するものというよりも予備的なものである。多少とも一貫した枠組みに組み込むことができたのは、収集した資

料のごく一部にすぎない。とはいえ、本書の記述資料は相当厚いものになっている。私が提起した問いへの簡単な答えを提案するものではないが、少なくともこれらの問題をより正確に体系化するのに役立つと信じている。

本研究の主題

本書では、Alavi (1973) が言うところの「原初的忠誠心」を取り上げる。この用語を用いることで、アラヴィーは、貧農たちが階級矛盾に気づくのを妨げ、彼らをして自己の客観的利益に反する行動をとらせる、親族関係やカーストといった集団的紐帯を説明しようとした。彼が描くパキスタンの例では、親族関係、カースト、とくにパトロン＝クライアント関係への忠誠心が、これにあたる。クルディスタンでは、これとは異なるが、同じく原初的な忠誠心が政治に深く影響を与えている。原初的とはいえ、こうした忠誠心は現代国際政治の重要な紛争のなかで作用している。米ソ対立や石油危機に関連する紛争は、私の国オランダに対してよりもずっと直接的な影響をクルディスタンに与えた。したがって、原初的忠誠心に影響を及ぼし、変更を加えたりするこうした外的要因に触れることなく原初的忠誠心を研究するとすれば、それは浅はかというものだろう。

クルディスタンにおける原初的忠誠心は、まず家族、部族、部族長（アーガー）に関わるものである。宗教的忠誠心、とりわけシャイフに対するものも、同じく強力である。シャイフとは、民衆的神秘主義者すなわち聖者であり、教団（デルヴィーシュ教団）の導師でもある。こうした忠誠心に楔を打ち込もうとさかんに試みられたが、多くは無駄に終わった。トルコでは、最初、アタテュルクが上からの政策によってアーガーやシャイフの権力を打ち破ろうとした。この10年は、若い社会主義者たちが農民を階級として動員しようとしてきた。しかし、クルド人の農民や牧夫たちは、依然アーガーやシャイフに従い続けている。選挙で当選するのは、ほぼいつもアーガーやシャイフ、もしくは彼らの息のかかった者である。部族民に対するアーガーの搾取があまりに露骨になり、もはやアーガーのもつ利用

価値とは釣り合わないような場合でさえ、アーガーに対する部族民の忠誠心はずっと続く。資本主義は忠誠関係を破壊する最も強力な動因であるとよく言われるが、すぐにはそうならないのも確かだ。他方で、原初的忠誠心が存在し、いたるところで作用しているようにみえても、別の忠誠心が働くのを妨げるわけではない。逆に、民族や階級への忠誠心といった新しい忠誠心が現れても、原初的忠誠心がすぐに機能しなくなるわけではない。これら多様な忠誠心が相互作用し、互いに相手を変化させるのはよくあることだ。その場合、どの忠誠心が最も強く主張されるかを決めるのは、具体的な状況である⁶。

トルコからの移民労働者の政治集会で、一度、私はある社会主義労働者組合で活動する小さなグループの人々と話したことがある。彼らはかなり階級意識の強い人たちだった。トルコ東部出身だと聞いたので、私はトルコ語からクルド語へと変えてみた。すぐに議論はより親密なものになった。私たちは、一時的にトルコ系の友人たちを排除した一つの内集団になった。しばらくして、私は、彼らの出身地域の有力なシャイフと友人であることを打ち明けてみた。反発されるものと思ったが、驚いたことに、私の信用はむしろ大きくなった。彼らはそれほど宗教的ではなかったが、感情的にはこのシャイフと結びついていたのである。

クルド民族主義と部族的・宗教的忠誠心は相反する関係にある。一方では、初期のクルド民族主義者たちは、伝統的権威であるシャイフやアーガー層の出身だった。実際、民族主義運動が大衆性を帯びたのは、これらの指導者や彼らが体現する価値に対する原初的忠誠心があったからにほかならない。他方で、これら伝統的指導者がいつまでも争い対立しているがゆえに、クルド人たちが真に団結することはできなかつたし、現在もそうであ

⁶ アラヴィーもまた以下の事実を強調していることに言及しておかないと、彼を公平に評価したことにはならないだろう。「農民社会では政治が派閥抗争の形をとるとはいえ、階級闘争モデルが拒否されるというわけではない。この二つは、異なる状況における異なる形態の政治的連帯を示しているのだ。さらに、血縁関係への忠誠心など原初的忠誠心は、階級的連帯に先だって現れるものの、それを排除するものではなく、むしろ、複雑な政治過程を通して階級的連帯が明確な形を取るのを助長する」(Alavi 1973: 59)。

る。ある族長が民族主義運動に参加するというだけで、彼に敵対する族長が運動に反対するというのはよくあることだった。しかも、たいていの部族民は一も二もなく自分たちの部族長に従った。1974年のイラク・クルディスタンでは、民族主義的感情が広く行き亘っており、しかもクルド民族運動とイラク政権との決定的な戦争が勃発したが、多くの場合、部族長がどの立場をとるかによって、部族が運動に参加するのか、中立を保つのか、それとも反対するのかが決まった。

本書では、まず第一に原初的の忠誠心を取り上げる。部族や神秘主義教団を描写するにあたっては、それらがクルディスタンでどのように機能しているか私が観察したものや、あるいは、インタビューや文献により過去においてどのように機能していたか私が再構成したものをもとにしている。そのうえで、部族や神秘主義教団の特徴の一端を説明してみたい。次に、外的要因が部族や神秘主義教団にどのような影響を与えたのか、あるいは与えているのかを明らかにし、クルド民族主義がこれら原初的の忠誠心との相互関係のなかでどのように発展してきたかをたどってみたい。第1章で概説的な情報を提示した後、第2章では、クルド系部族の構造上の特徴を述べるが、最初に抽象的な形で示し、次いで多様な複雑さをもつ具体的な部族について描写する。部族長の役割を検証し、指導者としての地位と紛争がどのように緊密に関連しているかを示す。シャイフがどれだけの重要性をもちうるかも、部族間紛争と関わっている。シャイフはこうした紛争を調停する理想的な立場にあり、また、争いの調停者として振る舞うことで政治権力を拡大するからである。第4章は、シャイフと彼らが率いる神秘主義教団を取り上げる。これらの教団についての文献は少なく、しかも私自身、強い関心をもっているため、政治的な意味合いをもつ側面に限らず、その思想や儀礼にも多くの注意を向けている。なぜ過去1世紀の間、ある教団が急速に拡大し、クルド民族主義において突出した役割を果たしてきたのかについても説明を試みている。

シャイフが世俗権力を得るための外的要因の一つは神との結び付きだ

が、もう一つは周辺諸国家である。多くの野心的な部族長たちも、隣接諸国と同盟、あるいはそこに服属することで、自らの社会における権力を手に入れていた。第3章では、現在のクルド系部族は自立的単位というよりも、ある意味では周辺国家によって作られたものだとする私の理論を、史料を提示しながら論証する。第5章では、以上の章で述べた論点を総括し、ある重要なクルド民族主義反乱について考察する。原初的忠誠心、(当時はまだぼんやりした概念であった) 民族への忠誠心、経済的搾取に対する農民の抵抗、そして部族=国家関係が、どのように機能し、相互に影響を与えているのかを示す。

本書は、原初的忠誠心に重点をおくもので、クルド社会についての包括的な視点を提供することはできないし、またそのつもりもない。都市化と人口移動、政党と労働組合の活動、さらに大事な経済関係といった重要な側面については取り上げていない。過去数十年のクルディスタンにおける政治的事件を理解するには、ここで考察する論点だけでは十分ではないが、それでもこれらは確実に必要なものである。

文献についての注記

本書のどの章でも、文献資料をかなり利用した。これらの文献については、参考文献目録と注で触れている。私が最も有益だと考え、頻繁に引用する資料について、ここで少し触れておきたい。私が利用した文献のなかでも最も重要な東洋語文献は、シャラフ・ハーン・ビドリースイーの『シャラフ・ナーメ Sharaf-name (シャラフの書)』と、エヴリヤ・チェレビの『セヤーハト・ナーメ Seyahat-name (旅行記)』である。『シャラフ・ナーメ』は、ビトリス君侯領の領主だったシャラフ・ハーンが、息子に地位を譲ったのち、16世紀最後の10年間に著したものである。各地のクルド系君侯領の歴史、あるいはむしろ、それらの支配家系の歴史を描いている。極めて詳細な年代記であり、ここに含まれる情報は、多くの地を旅した著者が生涯かけて収集したものと思われる。詳細な説明によって、クルド系諸侯たち

の政治的活動や彼らを取り巻く強国との関係が鮮やかに浮かび上がる。V. ヴェリアミノフ＝ゼルノフが校訂したペルシア語テキスト (Scheref 1860-62) と、サンクト・ペテルスブルグで最初に刊行され (1860-75年)、1969年にイギリスで再刊されたF. B. シャルモアによるフランス語訳 (Charmoy 1868-75) を参照している。

『セヤーハト・ナーメ』は、17世紀オスマン帝国の社会、政治、経済、文化についての最も興味深い資料の一つである。著者は帝国中を旅してまわり、イランやオーストリアといった近隣諸国にも足を運んだ。1655年と1656年にはクルディスタンの多くの地を旅し、ほとんどあらゆることについて記録を残した。彼自身、非常に幅広い好奇心を備えた、優れた観察者であったことがうかがえ、第4巻と第5巻にある記録は情報の宝庫である。残念ながら印刷版はとても満足のいくものではない。最初の印刷版はイスタンプルで刊行されたが、はじめの8巻がアラビア文字で、最後の2巻がローマ字で印刷された (Evliya Çelebi 1896-1938)。最初の数巻は、アブデュルハミト2世 [(在位1876-1909)] による検閲を受けたうえに、編者自身が理解できなかった部分を省略あるいは「訂正」しようとしたために、内容が大幅に損なわれている。これよりよい版はまだないものの、エヴリヤの手稿本が発見されたことで、信頼に足る版を作るのも容易になるはずである⁷。近年よく利用されるT. テメル・クランとN. アクタシュによる版 (Evliya Çelebi 1975-84) は、最初の印刷版に忠実に沿ったものである。本書ではこの版を参照したが、エヴリヤ・チェレビがどのような用語を使ったのかを正確に知りたいと思った時には、手稿本マイクロフィルムを利用した。

オスマン史に関わる数ある二次文献の中でも、ハンメル『オスマン帝国史』(Hammer 1827-35) は、いまもって最重要文献のひとつである。

⁷ エヴリヤ・チェレビの「クルド人ノート」のうち、ディヤルバクルに関する部分は、私とユトレヒト大学の4人の同僚によって校訂、翻訳、注釈されている (Bruinessen and Boeschoten 1988)。

著者は、自ら写本として収集した膨大な一次資料を用いている。これはオスマン帝国の歴史家たちの史書の有益な梗概であり、このことはクルディスタンにおける歴史的展開に関する部分についてもあてはまる。多くの点でいまだこれに勝るものはない。オスマン史に関する学術研究は急速に蓄積されているが、驚くことにこれらの研究でクルディスタンに言及しているものはほとんどない。イラン史はそれほど研究が進んでいないが、ここでもクルド人にはさして関心が払われてこなかった。このように相対的に軽視されてきたことを思えば、『イスラム大百科事典第1版』中のMinorsky, “Kurds”はいまなお突出した成果であり、基本的二次資料の一つである。

クルディスタンを旅したヨーロッパ人の報告は、時に興味深い補助的一次資料となる。これらは図書館を埋めつくすほどの量で、これら全てに目を通すことはできなかった。なかでも、私がおっとも有益だと思ったのはリッチ (Rich 1836)、レイヤード (Layard 1849, 1853)、フレイザー (Fraser 1840) である。

イギリスが第1次世界大戦時にイラクを占領した際、各州に統治機構を立ち上げてパックス・ブリタニカを確立・維持する任務は、政務官とその補佐の手に任された。彼らのなかに東洋学者がいて、うち何人かは自らの経験に関する興味深い本や論文を出版した。1957年に出たエドモンズの著作 (Edmonds 1957) は、その種のものでも最良のものである。彼は有能な言語学者であるとともにすぐれた観察者であり、クルディスタンを熟知していた。イギリス公文書館にあるイギリス外務省のファイルにも、同様の一次資料が含まれている。領事報告や行政官からの現地報告などである。このうち、1917-1938年のトルコ、イラク、イランに関するFO371ファイルを参照した。

有用な文献資料の最後の範疇は、たいてい在地の人々が書いた地方史である。最も頻繁に用いたのは、Firat (1970) と Dersimi (1952) である。

参考文献一覧

- Alavi, Hamza (1973), "Peasant Classes and Primordial Loyalties," *Journal of Peasant Studies*, I/1, 23-62.
- Beşikçi, İsmail (1969), *Doğu Anadolu'nun düzeni: sosyo-ekonomik ve etnik temeller*. Istanbul: E. Yayınları.
- Scheref, Prince de Bidlis (1860-62), *Scheref-nameh ou histoire des Kourdes*. Publiée pour la première fois, traduite et annotée par V. Véliaminof-Zernof. St. Pétersbourg: Commissionnaire de l'Académie Impériale des Sciences.
- Bruinessen, Martin van and Hendrik Boeschoten (1988), *Evliya Çelebi in Diyarbekir: the relevant section of the Seyahatname*. Leiden: Brill.
- Charmoy, François Bernard (1868-75), *Chèref-Nâmech ou Fastes de la Nation Kourde, par Chérif-Ou'ddîne, Prince de Bidlis, dans l'Iâlât d'Arzeroûme*. Traduis du Persan et commentés par François Bernard Charmoy. St. Petersburg: Commissionnaires de l'Académie Impériale des sciences.
- Dersimi, M. Nuri (1952), *Kurdistan tarihinde Dersim*. Halep: Ani Matbaası.
- Edmonds, Cecil John (1957), *Kurds, Turks and Arabs: politics, travel and research in North-Eastern Iraq, 1919-1925*. London: Oxford University Press.
- Evliya Çelebi (1896-1938), *Seyahatname*. 10 vols. Istanbul.
_____ (1975-84), *Evliya Çelebi Seyahatnamesi*. Sadeleştiren: Tevfik Temel Kuran ve Necati Aktaş, Istanbul: Üçdal.
- Fraser, James Baillie (1840), *Travels in Koordistan, Mesopotamia, etc.* London: R. Bentley.

- Fırat, M. Şerif. (1970), *Doğu illeri ve Varto tarihi*. Ankara: Milli Eğitim Basımevi.
- Hammer-Purgstall, Joseph (1827-35), *Geschichte des osmanischen Reiches*. 10 vols. Wien: Hartleben.
- Ibrahim, Ferhad (1983), *Die kurdische Nationalbewegung im Irak. Eine Fallstudie zur Problematik ethnischer Konflikte in der Dritten Welt*. Berlin: Klaus Schwarz Verlag.
- Jawad, Sa'ad (1981), *Iraq and the Kurdish Question, 1958-1970*. London: Ithaca Press.
- Kutchera, Chris (1979), *Le mouvement national kurde*. Paris: Flammarion.
- Layard, Austen Henry (1849), *Nineveh and Its Remains*. 2 vols. London: Murray.
- _____ (1853), *Discoveries in the Ruins of Nineveh and Babylon*. 2 vols. London: Murray.
- Minorsky, Vladimir, "Kurds," in *E. J. Brill's First Encyclopaedia of Islam*.
- Rich, Claudius James (1836), *Narrative of a Residence in Koordistan*. 2 vols. London: James Duncan, 1836.
- Thoden Van Velzen, H. U. E. (1973), "Robinson Crusoe and Friday: Strength and Weakness of the Big Man Paradigm," *Man* 8: 592-612.
- Vanly, Ismet Cheriff (1970), *Le Kurdistan irakien entité nationale: Étude de la révolution de 1961*. Neuchatel: Éditions de la Baconnière.
- Wolf, Eric R. (1969), *Peasant Wars of the Twentieth Century*. New York: University of Oklahoma Press.